



## 故郷への想いを支えに、 まやかしのない仕事で 本物を追求し続ける

有限会社宮城水産 代表取締役 木村武氏

北海道産の昆布とアラスカ産の生ニシンを使い、時間と手間を惜しまずに仕上げる昆布巻き。中国産をはじめとする輸入昆布が大半を占める市場にあっても北海道産にこだわり続ける理由、それはズバリ味の違いだ。こうして有限会社宮城水産は、四半世紀にもわたり本物を求める人々の期待と信頼に応え続けている。

### ■山国・長野県に本当に美味しい海の幸を！

今でこそ昆布巻きの製造に特化している当社ですが、当初は魚の加工なども手掛けており、水産物を扱う市場関係者からも頼られる存在でもありました。魚の知識や加工技術があったことにくわえ、「海のない長野県の人にも海の幸の美味しさをもっと知ってほしい」という気持ちで、真面目に商売をしていたからだと思います。



### ■東日本大震災が生まれ故郷の気仙沼を襲う

私たちが作る昆布巻きはすべて北海道産の良質な昆布と、アラスカ産ながら厳選した生のニシンを用いて作っています。特に昆布は、収量が気候や自然環境に影響を受けやすいものですので、大変な時期も少なからず経験していますし、実際、ここ数年は収量が激減しています。輸入ものに変えてしまえば随分と楽になるとは思いますが、これまでコツコツと地道に本物を突き詰める姿勢を評価してください、「美味しい」と喜んでくださるお客様を裏切りたくはありません。何よりそんな不誠実なことをしたら、あの大地震で多くの命が奪われ生活基盤のすべてを失ってもなお被災地である気仙沼に留まり、必死に頑張っている仲間に応援が立ちませんから。



早朝に出社し、1日の業務がスムーズに進むように準備を整えるという木村代表。過去、誰に教わるでもなく、知識・技術・経営ノウハウを磨いてきた。「若い経営者たちには何にでも積極的に挑戦してほしい。先人の姿からしっかり学び取って」とアドバイスとエールを送る。

### ■真の復興を目指す姿に刺激と気付きを得る

現地の仲間から話を聞いたり地元紙を毎日チェックしていますが、正直復興は進んでいませんね。複数の拠点を持つ大きな企業ですと、むしろ震災前より競合が減ったことで業績を伸ばしていたりもしますが、家族経営の小さな事業者のほとんどは、再起を諦めざるを得ないほどに厳しい状況です。一方で、複数の造船会社が共同事業を始めたたり、もともと親しまれていた帆布やサメ皮を使って多彩な製品製造を試みたり、コピーライターの糸井重里さんが「気仙沼ニッティング」という新規事業を立ち上げるなど、明るい話題もあります。こうして、気仙沼にある素晴らしい財産や人々の底力を目にして、故郷のことや商売のことを改めて考えさせられました。



### ■誠実に地道に、本物を突き詰めること

私が気仙沼のためにできるのは、商売同様にコツコツと誠実に継続的支援を行うこと。法人会の集まりでも、皆さんにご協力いただきながら海産物を紹介・販売するなど地道な取り組みを続けています。「自身の役割を的確に見極め、それを全力でまっとうする。人や物に対して真摯に向き合う。商売にも人生にも通じることです」。

木村武氏(きむら・たけし)  
有限会社宮城水産 代表取締役

宮城県気仙沼市出身。中学卒業後、東京の玩具メーカーに就職。妻・三枝子さんの父が始めた宮城水産へ転職、その後結婚。「仕事に興味」と語る働き者。

